

<臨床>東日本学園大学歯学部附属病院口腔外科における過去7年間の高齢入院患者の臨床統計的観察

著者名(日)	村瀬 博文, 田中 毅, 吉川 保, 田中 真樹, 清水 信, 宮沢 悦也, 宮田 雅代, 原田 尚也, 斉藤 基明, 北村 完二, 富田 喜内, 斉藤 全弘, 岡崎 有志, 奥村 一彦, 中川 徹, 武田 充弘, 山下 徹郎, 金沢 正明
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	6
号	2
ページ	155-160
発行年	1987-12-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00007323/

〔臨床〕

東日本学園大学歯学部附属病院口腔外科における
過去7年間の高齢入院患者の臨床統計的観察

村瀬 博文, 田中 毅, 吉川 保, 田中 真樹, 清水 信,
宮沢 悦也, 宮田 雅代, 原田 尚也, 斉藤 基明, 北村 完二,
富田 喜内, 斉藤 全弘*, 岡崎 有志*, 奥村 一彦*, 中川 徹*,
武田 充弘*, 山下 徹郎*, 金沢 正明*

東日本学園大学歯学部口腔外科第2講座

*東日本学園大学歯学部口腔外科第1講座

(主任: 村瀬 博文 教授)

*(主任: 金沢 正昭 教授)

Clinical and Statistical Observations on Aged In-patients
Hospitalized in the Department of Oral Surgery,
Higashi-Nippon-Gakuen University School of
Dentistry over the Past 7 Years.

Hirofumi MURASE, Tsuyoshi TANAKA, Tamotsu YOSHIKAWA,
Maki TANAKA, Shin SHIMIZU, Etsuya MIYAZAWA,
Masayo MIYATA, Naoya HARADA, Motoaki SAITO,
Kanji KITAMURA, Kinai TOMITA, Masahiro SAITO*,
Yushi OKAZAKI*, Kazuhiko OKUMURA*, Toru NAKAGAWA*,
Motohiro TAKEDA*, Tetsuro YAMASHITA*, and Masaaki KANAZAWA*.

Second Department of Oral Surgery, School of Dentistry,
HIGASHI-NIPPON-GAKUEN UNIVERSITY

*First Department of Oral Surgery, School of Dentistry,
HIGASHI-NIPPON-GAKUEN UNIVERSITY

(Chief: Prof. Hirofumi MURASE)

*(Chief. Prof. Masaaki KANAZAWA)

Abstract

Recently, with the rapid increase in the proportion of aged in the population and with increases in age, the number of senior citizens requesting medical diagnosis at the Department of Oral Surgery is increasing. We have conducted a seven year survey, from June, 1980 to May,

1987, on 83 admitted and treated patients over 60 years of age.

1. The number of hospitalized patients over the past 7 years was 581, with 14.3% of the patients over 60 years.

2. Of these 14.3%, 9.5% were under 70, 3.7% were under 80, 1.2% were over 80.

3. Of these 7.2% were male and 7.0% were female.

Besides the above, clinical and statistical observations were made and diseases and afflictions, and type of complication were classified, a classifications by the type of anesthesia was also made. The survey also includes the number of days of hospitalization and cases referred to our clinic etc.

Key words : aged in-patients, clinical and statistical observations

Ⅰ. 緒 言

近年,人口の高齢化が急速に進み,高齢化社会の到来に伴い,高齢者が口腔外科を受診する機会が多くなっている。高齢者は,加齢とともに,全身の機能が低下し,種々の全身疾患の合併症を有する患者も多い。入院患者においては,口腔外科的処置と全身疾患を有する患者の特性との関連について,特別の配慮も必要となってくる。

今回,われわれは,昭和55年6月より昭和62年5月までの過去7年間において,口腔外科に入院治療を必要とした60歳以上の高齢患者83名の臨床統計的観察を行ったので報告する。

Ⅱ. 対象症例

昭和55年6月より昭和62年5月までの7年間に,東日本学園大学歯学部附属病院口腔外科に

入院した60歳以上の患者83名について,年度別推移,年齢構成,性差,罹患疾患別分類,既往疾患別分類,麻酔方法別分類と入院日数などについて検討した。なお同一症例で数回の入院を繰り返している場合には,各回毎に1症例とした。

Ⅲ. 検討結果

1. 患者数と年度別推移(表1)

昭和55年6月から昭和62年5月までの7年間の入院患者総数は581名で,同期間中の60歳以上の高齢者の入院患者総数は83名で,入院患者総数数の14.3%を占めていた。

年度別推移では,60歳以上の高齢者の入院患者総数の占める割合は,漸次増加傾向を示しているが,近年になり減少傾向を示した。また,一年間の平均高齢入院患者は11.9名であった。

2. 年齢構成(表2)

表1 年度別推移

年 度	55.6 56.5	56.6 57.5	57.6 58.5	58.6 59.5	59.6 60.5	60.6 61.5	61.6 62.5	計
入院患者数 (b)	67	77	84	90	82	86	95	581
60歳以上の 入院患者数(a)	9	7	9	15	15	14	14	83
b/a×100%	13.4	9.09	10.7	16.7	18.3	16.3	14.7	14.3

表2 年齢構成

年齢 性別	0 9	10 19	20 29	30 39	40 49	50 59	60 69	70 79	80 以上	計
男 (%)	46 (7.9)	59 (10.2)	70 (12.0)	28 (4.8)	38 (6.5)	27 (4.7)	29 (5.0)	11 (2.0)	3 (0.5)	311 (53.5)
女 (%)	34 (5.9)	70 (12.0)	64 (11.0)	27 (4.7)	18 (3.1)	17 (2.9)	26 (4.5)	10 (1.7)	4 (0.7)	270 (46.5)
計 (%)	80 (13.8)	129 (22.2)	134 (23.0)	55 (9.5)	56 (9.6)	44 (7.6)	55 (9.5)	21 (3.7)	7 (1.2)	581 (100)

高齢入院患者の年齢構成

年齢 性別	60 69	70 79	80 以上	計
男 (%)	29 (35.0)	11 (13.3)	3 (3.6)	43 (51.8)
女 (%)	26 (31.3)	10 (12.0)	4 (4.8)	40 (48.2)
計 (%)	55 (66.3)	21 (25.3)	7 (8.4)	83 (100)

表3 性別頻度

性別	過去7年間における 全入院患者	高齢入院患者 (%)
男性	351	42 (13.5%)
女性	270	41 (15.2%)
計	581	83 (14.3%)

高齢入院患者

性別	患者数 (%)
男性	42 (50.6)
女性	41 (49.4)
計	83 (100)

過去7年間において、581名の患者に入院加療を行っているが、そのうち、60歳以上の高齢入院患者83名の占める割合は、14.3%で、60歳代は55名(9.5%)、70歳代は21名(3.7%)、80歳代は7名(1.2%)であった。

また、60歳以上の高齢入院患者83名中、60歳代55名(66.3%)で、男性29名、女性26名、70歳代は21名(25.3%)で、男性11名、女性10名、80歳以上は7名(8.4%)で、男性3名、女性4名であった。

3. 性別頻度 (表3)

過去7年間における入院患者総数は581名で、男性311名(53.5%)、女性270名(46.5%)であ

り、そのうち、60歳代以上の高齢入院患者は83名(14.3%)中、男性42名(7.2%)、女性41名(7.0%)であった。

また60歳以上の高齢入院患者83名中では、男性42名(50.6%)、女性41名(49.4%)で、男女比は男1:女0.98となり、ほぼ同数であった。

4. 罹患疾患別分類 (表4)

罹患疾患別分類では、悪性腫瘍18名(20.7%)、男性12名、女性6名、良性腫瘍14名(16.1%)、男性5名、女性9名、嚢胞11名(12.6%)、男性

表4 高齢入院患者の罹患疾患別分類

	悪性腫瘍	良性腫瘍	嚢胞	顎堤形成	炎症	外傷	神経	変形	顎関節症	歯牙 その他	計
患者数 (%)	18 (20.7)	14 (16.1)	11 (12.6)	17 (19.5)	8 (9.2)	3 (3.4)	2 (2.3)	1 (1.1)	1 (1.1)	12 (13.8)	87
男 (%)	12 (27.9)	5 (11.6)	4 (9.3)	9 (20.9)	3 (7.0)	2 (4.7)	2 (4.7)	1 (2.3)	0	5 (11.6)	43
女 (%)	6 (13.6)	9 (20.5)	7 (15.6)	8 (18.2)	5 (11.4)	1 (2.3)	0	0	1 (2.3)	7 (15.9)	44

表5 高齢入院患者の合併症

疾患名	神経	呼吸器	循環器	腎臓	消化器	肝臓	代謝	内分泌	血液造血器	膠原病	アレルギー	感染症	その他	計
疾患数 (%)	12 (7.8)	7 (4.5)	36 (23.4)	8 (5.2)	21 (13.6)	13 (8.4)	3 (1.9)	3 (1.9)	1 (0.6)	1 (0.6)	6 (3.9)	14 (9.1)	29 (18.8)	154 (100)

表6 高齢入院患者の麻酔方法別分類と入院日数

麻酔方法	全身麻酔	局所麻酔	その他	計
症例数 (%)	37 (39.8)	45 (48.4)	11 (11.8)	93 (100)
入院日数	1,621	917	92	2,630
1症例あたりの平均入院日数	43.8	20.4	8.4	28.3

4名, 女性7名, 顎堤萎縮17名(19.5%), 男性9名, 女性8名, 炎症8名(9.2%), 男性3名, 女性3名, 外傷3名(3.4%), 男性3名, 女性2名, 神経疾患2名(2.3%), 男性2名, 変形1名(1.1%), 男性1名, 顎関節症1名(1.1%), 女性1名, 歯牙, その他の疾患12名(13.8%), 男性5名, 女性7名であった。

5. 合併症 (表5)

合併症で最も多い疾患は, 循環器疾患で全既往疾患の23.4%, 次いで消化器疾患の22%神経疾患7.8%, 腎疾患5.2%, その他18.8%の順となっており, 60歳以上の高齢者の多くの患者は, 2つ以上の器官に何らかの合併症を有していた。

6. 麻酔方法別分類と入院日数 (表6)

麻酔処置症例は93症例で, 全身麻酔による処置症例は37症例(39.8%), 局所麻酔による処置

症例は45症例(48.4%), その他11症例(11.8%)であった。

入院日数総数は2630日で, 最短は1日, 最長は126日で, 全身麻酔による処置患者の入院日数総数は1621日(61.6%), 1症例あたりの平均入院日数は43.8日, 局所麻酔による処置患者の入院日数総数は917日(34.8%), 1症例あたりの平均入院日数20.4日, その他の処置で入院日数総数は92日, 1症例あたり平均入院日数は8.4日であった。

また1人あたりの平均入院日数は31.7日であった。

7. 高齢入院患者の紹介診療科 (表7)

高齢入院患者の紹介診療科については, 歯科が47名(56.6%), 医科が8名(9.6%)となっており, その内訳は, 歯科においては, 一般歯科42名(50.6%), 当院他科3名(3.6%), 総合病院歯科2名(2.4%), 総合病院5名(6.0%), 外科, 整形外科, 精神科が各1名(1.2%)で, 直接当科へ来院した患者は28名(33.8%)であった。

IV. 考 察

我が国が高齢化社会を迎え, 60歳以上の高齢者が増加し, 平均寿命も男女とともに急速な伸びを示し, 将来はさらに平均寿命も伸びることが推測されている¹⁾。高齢者は一般に60歳から

表7 高齢入院患者の紹介診療所

紹介診療所	歯科	医科	なし	計
患者数 (%)	47 (56.6)	8 (9.6)	28 (33.8)	83 (100)

紹介診療所	一般歯科	当院他科	総合病院歯科	総合病院	外科	整形外科	精神科	なし	計
患者数 (%)	42 (50.6)	3 (3.6)	2 (2.4)	5 (6.0)	1 (1.2)	1 (1.2)	1 (1.2)	28 (33.8)	83 (100)

65歳以上とされ、さらに細分すると、60歳から79歳までと80歳以上を区別するのが医学的、統計的にも合理的であるといわれている²⁾。また、厚生白書60年度版¹⁾によると、高齢者の有病率は若年者よりも高く、2つ以上の器官に何らかの合併症を有しており、高齢者の治療にあたっては十分な配慮が必要である。このようなことから、今回、われわれは、60歳以上の高齢入院患者の臨床統計的観察を行ったが、本邦における高齢入院患者の口腔外科における臨床統計的観察の報告は少なく、佐藤ら³⁾によって行われている。

年度別推移において、60歳以上の高齢入院患者の占める割合は、多少の増減はあるが、緩徐ではあるが、増加傾向にあることが推測された。針谷ら⁴⁾によれば、60歳以上の高齢者の来院患者数は漸次増大の傾向がみられたと報告しており、能美⁵⁾の報告のごとく寿命の伸びとともに、高齢者の人口が増加すると推測されており、高齢者の入院も漸次増加傾向を示すものと思われる。

年齢構成においては、昭和58年の厚生省、患者調査による人口10万に対する受療率では、55歳以上で急激に増加しており、高齢になるにしたがって増加傾向は増大しており⁶⁾、針谷ら⁴⁾の高齢者入院患者の口腔に関する意識調査においても、60歳代よりも、70歳代、80歳代において口腔に関する関心度が高く、川島⁷⁾の口腔悪性腫瘍の年齢別発生頻度においても60歳代、70歳代が多く、老齢となるにしたがって増加していくと報告しており、60歳以上の高齢者の口腔外科の入院患者の増加も推測することができる。

性別頻度においては、佐藤ら³⁾は、男性189名、女性167名と高齢入院患者は男性にやや多いと報告しており、昭和58年厚生省国民健康調査⁸⁾による性、傷病分類別にみた有病率(人口千対)によると歯及歯の支持組織の疾患において、男性3.0、女性4.4と女性にやや多いが、われわ

れの結果では、男性：女性はほぼ1：1であり、性別頻度では、あまり大きな差はないように思われた。

罹患疾患別分類において、佐藤ら³⁾は、悪性腫瘍176例、炎症65例、良性腫瘍49例、嚢胞29例、外傷15例の順であったと報告しており、われわれの結果では、悪性腫瘍18名、良性腫瘍14名、顎堤萎縮17名、炎症8名、外傷3名であり、高齢者の口腔外科的罹患疾患の主なるものは、悪性腫瘍、良性腫瘍、嚢胞、炎症、外傷、顎堤萎縮と思われる。

また、各罹患疾患別の最高高齢入院患者の年齢は、悪性腫瘍では男性78歳、女性76歳、良性腫瘍では男性70歳、女性71歳、嚢胞では男性70歳、女性67歳、炎症では男性87歳、女性81歳、外傷では男性70歳、女性61歳、顎堤萎縮では男性73歳、女性83歳、歯牙、その他では男性81歳、女性75歳であった。

合併症については、佐藤ら³⁾は、消化器系疾患28.3%、循環器系疾患27.8%、呼吸器系疾患19.4%が多かったと報告しており、針谷ら⁴⁾は、循環器系疾患54.2%、消化器系疾患30.0%、呼吸器系疾患17.5%と報告し、川島⁷⁾は、61歳以上の他科疾患合併症として、心疾患、高血圧、糖尿病等が多いと報告している。また厚生省、患者調査⁸⁾、昭和58年による年齢階級別にみた傷病分類別受療率で、65歳以上で1位、循環系、2位、筋骨格系、3位、神経系または消化系となっている。われわれの結果も諸家の報告と同様で、循環器疾患、消化器疾患、神経疾患の順となっており、循環器疾患では、高血圧症が最も多く、消化器疾患では、胃潰瘍、肝硬変、胆石、B型肝炎等が多く、神経疾患では、脳梗塞、自律神経失調症が多く、腎疾患では、慢性腎炎、腎盂腎炎が多く、呼吸器疾患では、肺炎、気管支炎等が多くなっており、厚生省・58年・国民健康調査⁸⁾による年齢階級、傷病分類別にみた有病率の60歳以上の高齢者の有病率と類似の傾

向を認めた。また、2つ以上の合併症を有する高齢入院患者は49名で59%であり厚生白書の指摘のごとく高齢者の治療には十分な配慮が必要である。

麻酔方法別分類では、全身麻酔処置と局所麻酔処置があるが、全身麻酔による処置では、フローセンが多く使用されるが、フローセンによる肝障害が報告されており、特に高齢者には、消化器疾患として肝疾患の罹患が多く、フローセンを使用した全身麻酔には注意を要する。また、局所麻酔による処置では、口腔外科では、血管収縮剤含有の局所麻酔剤が多く使用されるが、松浦⁹⁾は、歯科治療に関する65歳以上の高齢者の死亡症例7例を報告しており、歯科用局所麻酔剤中に含有されている血管収縮剤が循環器系に大きな影響を及ぼしていると報告しており、高齢者の合併症で最も多いとされているものが循環器系疾患であることより、血管収縮剤含有の局所麻酔剤を使用する時は十分な注意が必要である。また、久保田ら¹⁰⁾は、全身麻酔法について、高齢者は全身疾患を合併している割合が高いので、全身麻酔に際しては、急激な循環動態の変動を避け、呼吸機能に障害を与えないように呼吸管理には十分な注意を払う。また、精神鎮静法のうち、静脈内鎮静法は比較的軽篤な全身疾患を持った患者に適応し、この方法は、血圧、心拍数を安定させ、健忘効果も期待できること、恐怖感の強い患者にも良い適応となる。一方笑気吸入鎮静法は、呼吸器、循環器系疾患を合併している患者には極めて有効な方法である。局所麻酔注射時の血圧上昇と心拍数の増加を十分に抑えられないが、静脈内鎮静法よりも呼吸や循環に対する影響が少なくまた高濃度酸素を吸入させるので、一般開業医にも簡単に適応できる利点があると報告している。

高齢入院患者の紹介診療科については、歯科よりの紹介が最も多く、56.6%で、次いで当科へ直接来院した33.8%となっており、高齢者に

口腔に関する関心度の高さが示されており、医科からの紹介は9.6%で、そのほとんどが外傷、炎症等の疾患であった。

V. 結 語

昭和55年6月より昭和62年5月までの過去7年間に、東日本学園大学歯学部附属病院口腔外科に入院した60歳以上の高齢入院患者83名の臨床統計的観察を行った。

1. 年度別にみた60歳以上の高齢入院患者は、漸次増加傾向を示した。
2. 罹患疾患別分類では、悪性腫瘍、良性腫瘍、嚢胞、顎堤萎縮、炎症、外傷の順であった。
3. 合併症は、循環器疾患、消化器疾患、神経疾患、腎疾患の順であった。
4. 高齢入院患者の紹介診療科は歯科が半数以上であり、直接当科来院、医科よりの紹介の順であった。

引用文献

1. 厚生省, 厚生白書, (昭和60年度版), 厚生統計協会, 東京, 1980.
2. 小坂樹徳, 吉川政己, 原沢道美, 五島雄一郎, 蔵本築, 葛谷文男, 勝沼英守, 亀山正邦: 老年者の診療について, 老人科診療, 1: 3-14, 1980.
3. 佐藤和良, 西嶋 寛, 尾崎雄一郎, 鶴田敬司, 高橋利近, 西嶋克己: 当教室における過去15年間の高齢者入院患者の臨床統計的観察, 第2回日本老年歯科医学研究会総会(抄), 1987.
4. 針谷路美, 西田紘一, 豊浦宣行, 西原茂昭, 長谷川幸一, 河村泰久, 井田修司, 小島 健, 星山寿男, 長田 寛, 宮田秀美, 久代秀郎, 成田令博, 内田安信: 当科受診高齢者についての臨床統計学的観察, 日本口腔外科学会雑誌, 26: 741-751, 1980.
5. 厚生省, 昭和57年, 国民健康調査, 昭和58年.
6. 川島康: 老年者歯科, デンタルダイヤモンド社, 東京, 1985, 30頁
7. 厚生省, 昭和57年, 患者調査, 昭和58年
8. 松浦英夫: 歯科麻酔に関連した偶発症について, 日本歯科医師会雑誌, 39: 517-526, 1986.
9. 久保田康耶, 深山治久: 歯科治療時における高齢者の全身管理, 老年歯科医学, 1: 24-29, 1987.